

第四十九回中央教化研究会議 基調報告

## 法華経は現代の私たちの物語

三原正資

### 変化したお寺をとりまく状況

私たちは、この数年の間、葬式仏教の大切さを強調してまいりました。よい意味での葬式仏教は、これからも必要とされることでしょう。

この度、皆さまのお手許に届けた『御降誕八〇〇年のお題目に向かって——人口減少時代の教化学——』の中で、まず初めに鈴木隆泰先生、さらに小谷みどり先生の発言を引用しています

葬式をしているということは決して仏教の墮落でも変質でもありません。(略) 日本で仏教が根づくためには、葬式と一緒にする必要があったのです。

本来の意味での葬式仏教を機能させることが世の中のひとたちから今、求められていることであり、それが仏教の大きな役割であると私は思います。

ところが、日本は有史以来初の人口減少時代を迎え、葬儀とお寺をとりまく日本社会の状況は、急速に変化の度合いを深めています。

NHKスペシャル「無縁社会」を担当した報道局社会部記者板倉弘政氏は、六年前に日本の家族の姿を次のように指摘していました。

三世代同居から核家族・単身化ということと同じように、今、圧倒的に進んでいるのが未婚化です。(略)二〇三〇年の時代には、男性で三人に一人が生涯未婚だといわれています。女性も、四人に一人が生涯未婚だといわれています。

今や、すでに「おひとりさま」の時代が到来し、直葬や〇葬があたりまえとなりました。葬儀・法事対応型のお寺や僧侶の先行きは、けっして明るなものとはいえません。

では、どうしたらよいのでしょうか。これが、この中央教研を企画した理由の一つです。

三・一一東日本大震災の後、中央教研は〈宮沢賢治〉をテーマに取り上げ、その「開催趣旨」の中に、次のように述べました。

教化の基は信仰であり、信仰の基となるのは、法華経と出会った時の、感動、感激です。これなくして、教学も教化ありません。熱心な門徒の家に生まれた賢治が、法華経に触れ、目覚めた、その感動を、私たちも共有し、明日の教化につなげて行きたいものです。

この中央教研では、皆さま一人ひとりが法華経と出会った時の感動を、「法華経は現代の私たちの物語」として確  
認し、語りあい、教化につなげていきたいと考えています。

では、なぜ、「物語」なのか。

まず、宗祖は、神国王御書（定遺八八七頁）や法蓮鈔（定遺九四二頁）で、説教、あるいは経典のことを（仏の）  
「御物語」と述べられています。

また、法華経は物語の形式を借りた経典だからです。

『天地明察』や『光圀伝』をあらわした作家・冲方丁氏うぶかたぢんは、『偶然を生きる』（角川新書 二〇一五年）の中で自ら  
の作家活動をふりかえり「物語」論を展開し、次のように述べています。

物語とは人間が自分たちの人生を理解しようとする試みだともいえます。

法華経は私たちの人生をどのようなものとして指し示しているのでしょうか。

## 物語としての法華経

「法華経は現代の私たちの物語」とは、どういうことでしょうか。

さきほど述べたように元来、法華経はインドで制作された「物語」の形式をかりた聖典でした。

勝呂信静先生は、その著書、『ものがたり 法華経』（山喜房佛書林 平成八年）の「まえがき」に、次のように記  
されています。

新しい試みとして本書「ものがたり・法華経」を書いてみました。

法華経はいまの私たちにとって大変にむずかしい書物のように感じられますが、それは古代の言葉で書かれていることと、仏教独特の術語や表現が用いられていることによるものであって、そういう点を除けば、元来は物語ふうのやさしい経典であったと思います。

私は小学生低学年のころ、マンガ風の法華経を読みました。そして、その中にカラーで美しく描かれた絵がありました。それは旅人たちが化城、幻しの街の中で歓楽を尽くすパラダイスの場面であったことを憶えています。化城喻品だったのでしょう。「物語ふうのやさしい経典」であればこそ、今なお、私の心に残り、多くの人びとを魅了するのです。ところが、現在、このような機会にふれることが少なくなったことは残念です。

## 法華経は日蓮聖人の物語

さて、この法華経を「日蓮の物語」と受けとめられた方が日蓮聖人です。いうまでもなくご降誕八〇〇年とはこの物語の中のひとこまでです。

佐渡流罪から鎌倉へお還りになられ、その後、身延山へ入られた宗祖が筆をとられた法華取要抄には、次のように記されています。

問て曰く 法華経は誰人の為にこれを説くや。答て曰く（略）末法を以て正と為す。末法の中には日蓮を以て正と為す也。（定遺八一三頁）

この有名な一節は、「法華経は日蓮聖人の物語」であると宗祖が受けとめられていたことを、力強く物語っています。開目抄や観心本尊抄、そしてこの法華取要抄に、いわゆる「色説」として詳しく述べられているところが、それに当たります。

## 仏典に説かれる豊かな物語との出会い

今、私たちは法華経は過去の物語ではなく、宗祖が「法華経は日蓮のために説かれた、現在の日蓮の物語」とお考えになられたように、「法華経は現代の私たちの物語」として読むべきだと思います。

なぜ、そうなのか、私自身がそう考えるに至った経緯を若干述べたいと思います。

一二、三年前、私は仏教美術、なかでも、ガンダーラ仏や古写経に魅かれました。あるとき、聖武天皇筆と伝えられ、「大聖武」と呼ばれている奈良時代に書写された賢愚経に興味をもちました。賢愚経（大正蔵第四卷）は小乗部に属し、全一三卷六九品で構成され、ジャータカを含むこの経典はわが国の『今昔物語』の成立に影響を与えたと考えられています。すでに梵本は失なわれ、今日ではチベット本が残っています（『国訳一切経 本縁部七』解説）。

有名な「貧女の一点」として知られる貧女難陀品をはじめ、すぐれた短編小説、あるいは今日の新聞や週刊誌の三面記事を収集したかのような各章はたいへん魅力的で、古代インドの社会や伝統的僧院仏教の様子を眼前にのみがえらせてくれるかのようにです。

宗祖は法華題目鈔に

小乗の四諦の名計りをさやぶる鸚鵡なお天に生ず。三帰計りを持<sup>たもつ</sup>人大魚の難をまぬかる。（定三九二頁）

と、唱題成仏の助証を挙げておられますが、それらはこの賢愚経の二鸚鵡聞四諦品、富那奇縁品が典拠であることを、読みすすむうちに発見するという愉快なこともありました。

このようにして、私はこの賢愚経の中に、イキイキと展開される、古代インド僧院仏教の修行僧の物語に魅了されました。また、そのうちのいくつかが法華経の説話と共通していることにもたいへん興味をもちました。しかし、そのころの私は新しい大乘仏教成立論に不勉強であり、それ以上に考えることはありませんでした。

ところが六年前、平成二二年(二〇一〇)、サンフランシスコの近く、ハイワード市にある国際開教布教センター(当時)へ行く機会があり、そこで「アメリカ仏教」という日本仏教とは異なる仏教に出会うということがありました。これを縁に、当時、UCLAアジア言語文化部教授であったグレゴリー・シヨペン氏の著作『大乘仏教興起時代インドの僧院生活』(春秋社 二〇〇〇年)を読み、さらに刊行が始まった『シリーズ大乘仏教』(春秋社 二〇一一年)を読んで、法華経や賢愚経に説かれている説話、物語の歴史的背景を知ったのでした。平成二四年度の教団論セミナーに現在の大乗仏教成立論の提唱者の一人、下田正弘先生をお招きしました。ご記憶のことと思います。それは非常に興味深く、その印象を私は平成二四年から二五年にかけて「宗報」に連載した「法華経をめぐる冒険」の中に書かせていただきました。その内容を要約しますと、法華経や賢愚経に説かれている物語は、部派仏教、僧院仏教の中から大乘仏教、法華経が生まれている状況を反映している、と私は理解したのです。

法華経は金口の直説という立場に立ちながら、法華経は一〇二世紀頃制作された経典であると受けとめることはできないものと現在、考えているところです。法華経の研究が進むにつれ、宗祖の法華経観が勝れていることが明らかになるのではないのでしょうか。午後の鈴木先生のご講演を楽しみにしています。

## 重なり合う過去と現代

さて、賢愚経の中には、舍利弗を評価して、「仏に次ぎ第二の世間の導師たる舍利弗なる者なり」という一節があります。ところが、賢愚経は小乗部の經典とされているにもかかわらず、舍利弗への痛烈な批判が見られるのです。紹介しましょう。

賢愚経七瓶金施品は黄金を愛するあまり、死後、毒蛇となった商人の物語です。

ひとりの商人がいました。たいへん商売熱心だった彼は稼いだ「錢財」によって「金を買ふ」ことが生きがいであったのです。彼は黄金を瓶びんにたくわえ、まず一つの瓶いっぱい黄金をためると、家の中に穴を掘り、瓶を埋めて隠したのです。商人の黄金に注ぐ情熱は

種々に身を勤め体を苦しめ年歳を経積て終に衣食せず。

と描写されています。彼は食べるものさえ惜しんで、懸命に働らき、たとえば現代人がカナダのメイプルリーフ金貨を買うように黄金を買い集め、ついに黄金は七つの瓶に溢れたのです。ところが商人は働き過ぎたために健康をそこね死んでしまいました。死んだのちに、彼は黄金に執着するあまり、毒蛇に生まれかわり、黄金をおさめた七つの瓶にまといつき守るのです。黄金への「愛心」は尽きることなく、彼は何回も何回も毒蛇に生まれては七つの瓶にまわりついて瓶をまもったのです。

賢愚経は、この毒蛇は舍利弗の前世の姿であると説いています。舍利弗の過去世が守銭奴の商人であり毒蛇であったとは、出家教団の制作したお経としてはずいぶん思いきった表現です。この他にも、この經典には、僧院仏教の僧

侶が財産をたくわえ、執着していることを批判した表現がみられます。

大乘仏教は、東西の交易によって豊かになったインドの社会の中で、墮落していった僧院仏教への批判から興つたと見るとき、私は經典に説かれる物語は、現代の豊かな日本社会、そこに生きる私たちの物語であると見ることができると思うのです。

これに比べると、法華經に説かれる、舍利弗をはじめとする仏弟子への批判は、たいへん抑制されたものです。例えば方便品には、よく知られた次の一節があります。

諸仏の智慧は甚深無量にして、其の智慧の門は難解難入なり。一切の声聞・辟支仏の知る能わざる所なり。

しかし、この他、提婆達多品の舍利弗の「默念信受」のように抑制された表現の中に、本質をついた鋭い批判があるわけです。この場合、舍利弗に象徴された伝統的僧院仏教の指導的立場の僧侶はたいへん嫌な思いをいだいたことでしょう。大乘經典を制作して仏教刷新をめざした運動は、誰もが仏にならなければならぬとされた仏教の開祖・釈尊に帰ろうとした動きだったのです。法華經は、そのことを釈尊在世のできごととして描いたのでした。

## 物語を伝える

「法華經は現代の私たちの物語」とは、宗祖におかれては、たとえば寺泊御書において

勸持品に云く、有諸無智人惡口罵詈等云云。日蓮は此の經文に当れり。汝等何ぞ此の經文に入らざる。(定遺五



と述べられて、いわゆる色説をされた結果、

其時は日蓮は即ち不輕菩薩為るべし（略）日蓮は八十万億那由他の諸の菩薩の代官として之を申す。（定遺五一  
五頁）

と、常不輕菩薩の自覚や勸持品の菩薩の自覚をいだかれたことをいうのです。そして、法華取要抄に示されている  
上行菩薩所伝の妙法蓮華経の五字（定遺八一六頁）

を弘めるといっわばさまざま「物語」が大きな「物語」へとつながっていくのです。

さて、このあとの分科会であつかわれるテーマ、いわば四つの物語についてふれておこうと思います。この四つの  
物語を参加者ご自身の物語として考えていただきたいと思ひます。

各分科会のはじめに、テーマの「物語」がものがたられることは、法華経が勧めた「法師」による説法とお考え下  
さい。

現在、日本の社会の中で、仏教の「物語」がどれほど共有されていることでしょうか。クリスマスに匹敵する人びと  
の共有する仏教の「物語」があるでしょうか。盂蘭盆施餓鬼会にかかわる目連と青提女の物語ぐらいですか。私たち  
は法師として、まず、大きな物語へとつながっていく、一つ一つの小さな物語を大切に伝えていきたいものです。

#### ○第一分科会 長者窮子の物語

この物語から、天台大師は東アジア仏教圏に大きな影響を与えた「五時判」を樹立し、いわば別の「物語」を紡ぎ

出しました。

しかし、高齢化社会に直面している今日、四大声聞の独白、

我等僧の首に居し、年竝に朽邁せり。(略) 我時に座に在て身体疲懈す。

という苦しみにも似たことばに接して、高齢者の精神の成熟のためのヒントを学びたいと思います。そして、青壮年期の方々は成長の過程を学んではいかがでしょうか。

### ○第二分科会 虚空会の物語

宮沢賢治は、法華経を「物語」のかたちで人びとに伝えようと思いました。その代表作が「銀河鉄道の夜」です。二人の男の子が宇宙を走る鉄道に乗って旅をする場面が、虚空会に当たります。このほかにも、有名な「よだかの星」は〈龍女成仏〉を翻案した物語ではないか、と私は推測しています。

不思議な虚空会の物語について、豊かな想像力を駆使して、考えをめぐらして下さい。

虚空会という制約を突破した無限定の悟りの世界を語り合ってください。

### ○第三分科会 龍女成仏の物語

九歳の娘の母である大谷三穂<sup>2</sup>等海佐が海自の護衛艦の艦長に就任する現代(産経新聞六月四日)、龍女成仏をどう考えますか。

ところで、賢愚経貧女難陀品は「貧女の一点」として知られる物語です。そして、この物語の末尾には、釈迦仏の

過去世は一人の女性だったという次のようなエピソードがそえられています。

私に釈迦仏は遠い過去世において牟尼という名の王女だった。王女はひとりの比丘を一心に供養した。その結果、王女は仏より未来世に釈迦牟尼という仏に成ると授記されたのだった。王女は歓喜して、「化して男子と成」（化成男子）って沙門となることを願ひ、仏に許されたのでした。

これらの経典が制作された時代は、自由な空気が満ちていたのでしょう。そして、当時の経典制作者は、ブツダは男女の性別にかかわらず仏に成るとお考えになっていたと確信していたのです。

#### ○第四分会 良医治子の物語

宗祖はこの良医治子の物語から、観心本尊抄に「今の遣使還告は地涌なり。是好良薬とは（略）南無妙法蓮華経是也」（定遺七二七頁）と述べられ、教義体系を導き出されました。

賢愚経優婆塞兄弟所殺品には、兄が亡くなったという偽りの手紙を書くという、良医の物語の素材のような話があります。毒薬を飲んで狂った子どもたちとは、現代の私たちのようではありませんか。

先崎彰容氏（せんざきあきなか日本大学教授）は『異和感の正体』（新潮新書 二〇一六年）の中で「思想家とは、時代を診る医者である」と述べています。良医の判断に注目してもらいたいと思います。

### 物語の役割

さて、物語には、どのような役割があるのでしょうか。

昨年末、映画「スター・ウォーズ」第七作が上映されました。一九七七年、第一作が上映されてから四〇年、「スター・ウォーズ」は、アメリカ国民を統合する物語といえるでしょう。本年五月二七日、広島を訪問したオバマ大統領

領が所感の中で「私の国の物語は（略）私たちは一つの家族の一部であるという根源的で不可欠な考え方です」と述べたことは記憶におありでしょう。このように物語は、私たちに理想を示し、進むべき道へと導く役割をもっています。

私は三年ほど前、「宗報」に連載した「法華経をめぐる冒険」の中に次のように書きました。

（仏典がもたらした）数多くの物語は、かつての日本人に鮮烈な印象を与える異質の世界だった。現代を生きる人びとに新たな「物語」を提供すること、生きる目的を失った人に別の視点を知ってもらうこと、そして人が生きる力を回復することが（物語の）役割である。（略）

法華経は、方便と真実をテーマとして、それら（物語）の素材をていねいに構築し、私たちの仏教と人生への見方に、めくるめくような視点の転回をもたらした。今、私たちは、法華経（という物語）によって、どのような希望を人びとに伝えることができるだろうか。（「宗報」平成二五年三月号）

分科会において、みなさま、充分にご存知の法華経を充分に語り合い、新たな現代の私たちの物語として再発見・再読し、未信の人びとに伝え、共感し、共有していただきたいと思えます。

さいごに、ここ一〇年に及ぶお題目結縁運動の中で、みなさまによって充分議論し尽された感のある「常不輕菩薩の物語」に、全く新しい見方がもたらされた一例を紹介します。

天童荒太さんの直木賞受賞作『悼む人』です。この小説が刊行されたのは二〇〇八年、「オール讀物」に掲載された頃から一〇年がたちます。昨年、映画化され、この中にも、すでに読まれたり、観た方もいらっしやることでしょう。

この四月、私は店頭で偶然、この本の文春文庫版を手にとり、なにげなく巻末の解説に目をやりました。そこには、昨年出版された『死で終らない物語について語ろうと思う』（文藝春秋）の著者、浄土真宗僧侶・釈徹宗師の「書評」が掲載され、釈師は〈悼む人〉について次のように述べていました。

（小説の主人公）静人は死者を悼む巡礼者であり、（略）彼によって死者を取り巻く人々は揺さぶられる。静人の行為は、石を投げて追い払う者も含めてすべての人々を仏として拝み続けた『法華経』の常不軽菩薩を連想させる（著者にとっては仏教の文脈で読み取られると不本意かもしれない）。

釈師のこの一言によって、私は『悼む人』（上下）をもとめ、早速読むと、なるほど〈悼む人〉は常不軽菩薩のよみに思えてくるのです。私はあらためて、常不軽菩薩の物語は、このような形で「現代の私たちの物語」となつて、よみがえるのかと思いました。それとともに、葬式仏教として死者により添う私たちの物語として、〈悼む人〉は深い問いかけをしているように感じました。

さて、現在の大乗仏教成立論は、当初は伝統的僧院仏教の中に大乗仏教の教団はなく、菩薩の志をもった修行僧の制作した大乘經典がのちに大乘教団を産み出したというものです。この意味では、私たちが「法華経は現代の私たちの物語」と受けとめることは、法華経を制作した人々の志、そして日蓮聖人に応えるものでしょう。八〇〇年前、日蓮聖人がこの法華経に込めてご出現、ご降誕されたように、今、私たちが生まれ変わらなければならぬのではないのでしょうか。

法華経のさまざまな物語が、参加者の方々によって「現代に生きる私たちの物語」として甦えり、未信の人びとに伝えられることを念じて基調報告を終わります。